

日本語構造伝達文法の中国語への適用

——述目句の研究——

蔣 家義

要 旨

「日本語構造伝達文法の中国語への適用」という研究の一環として、本稿は述目句の構造モデルの描出を試みた。まずは、述目句の述語と目的語との意味関係の多様性を論じた。次に、述目句の述語となる動詞の格フレームを取り上げた。出現頻度の高い、或いは日本語に比べれば、特徴のある二項動詞の格フレームのタイプを整理してまとめた。その上で、それらの格フレームのタイプ（紙幅の関係で本稿は7タイプのみを扱った）を持つ二項動詞が構成した述目句の構造モデルを描出した。

キーワード：述目句、格フレーム、深層格、日本語構造伝達文法、構造モデル

1 はじめに

本稿は「日本語構造伝達文法の中国語への適用」という研究の一環である。前稿「日本語構造伝達文法の中国語への適用—予備的考察—」（蔣 2012a）では、研究の目的、考察の対象、日本語構造伝達文法の基礎（構造モデル、時空モデル）等を論じた。「日本語構造伝達文法の中国語への適用—主述句の記述的研究—」（蔣 2012b）では、主述句の記述的研究を行い、主述句の構造モデルの描出を試みた。前稿に続いて、本稿では、述目句について考察を行う。日本語構造伝達文法との関係等については、前稿をご参照いただければ幸いである。

本稿の2節では、述目句の定義を述べ、3節では、述目句の述語と目的語との意味関係の多様性を論じる。4節では、述目句の述語となる動詞の格フレームを取り上げる。5節では、出現頻度の高い、或いは日本語に比べれば、特徴のある二項動詞の格フレームのタイプを整理し、それらの格フレームのタイプを持つ二項動詞が構成した述目句の構造モデルを考察する。

2 述目句とは

述目句は (1)¹ に示すように、“述語—宾语”（述語—目的語）という文法関係で結合した句である。一般に述目句の前の部分は動作や行為、状態を表す単語² または句³（述語）であり、後の部分はこの動作や行為、状態と関連のある事物を表す単語または句（目的語）である。

- (1) a 洗 衣服⁴ (服を洗う)
洗う 服
- b 画 人像 (肖像を描く)
描く 肖像
- c 去 学校 (学校へ行く)
行く 学校
- d 抽 烟斗 (パイプでタバコを吸う)
吸う パイプ
- e 下 大雪 (大雪が降る)
降る 大雪
- f 是 学生 (学生だ)
だ 学生
- g 教 我 外语 (私に外国語を教える)
教える 私 外国語

述目句は“述宾短语”や“述宾词组”の日本語の訳語である。この構造は1980年前後までは“动宾短语”や“动宾词组”とも呼ばれていた。鳥井（2008：237）によれば、“动宾”の“动”は品詞名の“动词”（動詞）を、“宾”は文成分名の“宾语”（目的語）を用いていて、論理的でないので、文成分名の“述語”（述語）と同じ文成分名の“宾语”から“述宾”という語を用いるようになったということである。

3 述目句における述語と目的語との意味関係

日本語では目的語は「本を読む」の「本を」、「医者を呼ぶ」の「医者を」等のように、「述語の表わす行為・動作の対象となり、その行為・動作を蒙るもの、という意味的關係にあって、それを示すことによって述語の意義を充足せしめるもの。（中略）

¹ 本稿の例文は主に《(人机通用) 现代汉语动词大词典》, 《汉语动词用法词典》, 《HSK 中国汉语水平考试词汇大纲汉语 8000 词词典》, 《商务馆学汉语词典》から引用した。“*”の付いた例文はほかの参考文献から引用した。

² 品詞は動詞であると考えられる。

³ 動詞句であると考えられる。

⁴ 以下, “ ” (一重下線) で述語を示し, “ ” (波線) で目的語を示す。

形態上は連用格助詞の「を」によって示されるのが普通である」とされている（渡辺 1971：165）。

これに対して、中国語では目的語（即ち“宾语”）は述語の後にあり、述語の表す動作や行為、状態と関連のある事物を表すものとされている。このような目的語と述語は「行為・動作を蒙るもの」とどまらず、多種多様な意味関係にある。

例えば、上に挙げた（1）のうち、aでは目的語“衣服”が述語“洗”の表す行為の「受事」（自発的な動作、行為に関わる直接の客体である）であり、bでは目的語“人像”が述語“画”の表す行為の「結果」（生じたり、引き起こしたり、或いは達成したりする事物である）であり、cでは目的語“学校”が述語“去”の表す行為の「処所」（事態の起こる場所や状況、或いは経過域である）であり、dでは目的語“烟斗”が述語“抽”の表す行為の「工具」（使われる道具である）であり、eでは目的語“大雪”が述語“下”の表す動作の「施事」（自発的な動作、行為、或いは状態の主体である）であり、fでは目的語“学生”が述語“是”の表す状態の「系事1」（主体の類別や身分、役割で、動詞“是”（…だ）、“姓”（姓は…である）、“叫”（（名前は）…という）、“等于”（…に等しい）等の表す事態の客体である）である。gでは間接目的語“我”と直接目的語“外语”がそれぞれ述語“教”の表す行為の「与事」（利害関係を有する間接の客体である）と「受事」である。

（2）に示すように、「受事」、「結果」、「処所」、「工具」、「施事」、「系事1」、「与事」のほか、「方式」（用いられる方法や形式である）、「目的」（達成しようとする目標である）、「時間」（事態の起こる時点、或いは持続する期間である）等の意味関係もある。（2）のaでは“仿宋体”が“写”の「方式」であり、bでは“博士”が“考”の「目的」であり、cでは“春节”が“过”の「時間」であると考えられる。

- (2) a 写 仿宋体 （宋朝体で書く）
書く 宋朝体
- b 考 博士 （博士後期課程を受験する）
受験する 博士後期課程
- c 过 春节 （春節を過ごす）
過ごす 春節

このように、中国語の目的語と述語との意味関係は多種多様である。その原因として、以下のことが考えられる。①日本語では一般に格助詞「を」を伴うか否かによって、目的語は規定されている。これと同時に、目的語の範囲も制限されている。中国語では目的語、即ち“宾语”は述語の後にあるという語順によって、規定されている。語順が無標的で、語彙的意味を持たないので、“宾语”の範囲は制限されない。したがって、②中国語文法での“宾语”という概念は日本語文法での目的語という概念より外

延が広い。前者は上に述べたように、述語の表す動作や行為、状態と関連のある「受事」、「結果」、「処所」、「工具」、「施事」、「系事」、「与事」、「方式」、「目的」、「時間」等を表しており、「行為・動作を蒙るもの」（「受事」にあたる）を表す後者に対して上位概念であると言えよう⁵。

4 動詞の格フレーム

こうした目的語と述語との意味関係は格文法で言う、述語となる動詞または動詞句に対して目的語となる単語または句の深層格にあたる。本節から述目句の目的語（及び主語）となる単語または句の深層格を考察するが、まず述語となる動詞の格フレームを取り上げる。

動詞の選択できる深層格には、動詞の表す事態の成立に必ず必要なものとそうでないものがある。例えば(3)では、動詞“洗”に対して名詞“我”、“明天”、“被罩”の深層格はそれぞれ「施事」、「時間」、「受事」である。そのうち、「施事」と「受事」は動詞“洗”の必ず必要な深層格であり、「時間」は必ずしも必要でない深層格である。

(3)	我	明天	洗	被罩	(明日、布団カバーを洗う)
	私	明日	洗う	布団カバー	
	施事	時間		受事	

動詞とその動詞の表す事態の成立に必ず必要な深層格はいわゆる格フレームを構成している。(3)の動詞“洗”と深層格「施事」、「受事」は「施事+“洗”(洗う)+受事」という格フレームを構成している。

そして、すべての動詞がそれぞれ格フレームを持つが、動詞の性質、必ず必要な深層格の種類及び数によって、それらの格フレームをいくつかのタイプに分類することができる。例えば(4a)の動詞“打”が「施事+“打”(殴る)+受事」という格フレームを持ち、(4b)の動詞“踢”が「施事+“踢”(ける)+受事」という格フレームを持つが、「施事+“打”(殴る)+受事」、「施事+“踢”(ける)+受事」、(3)の「施事+“洗”(洗う)+受事」は3つの動詞の性質（自発的な行為を表すこと等）、必ず必要な深層格の種類（「施事」と「受事」）及び数（2つ）が同じであると考えられる。したがって、「施事+“打”(殴る)+受事」、「施事+“踢”(ける)+受事」、「施事+“洗”(洗う)+受事」を「施事+動詞（自発的な行為を表すこと等）+受事」という格フレームのタイプに分類することができる。

⁵ 両言語の根本的な違いを考えに入れれば、中国語文法での“宾语”と日本語文法での目的語とは別の概念であると言っても過言ではないであろう。

(4) a 哥哥 打 弟弟 (兄が弟を殴る)

兄 殴る 弟
施事 受事

b 运动员 踢 球 (スポーツマンがボールをける)

スポーツマン ける ボール
施事 受事

格フレームのタイプは数多くある。例えば《(人机通用) 現代汉语动词大词典》(林・王・孫 (編) 1994) は 2000 個余りの動詞の格フレームを詳細に記述した上で、表 1 に示すように、それらの格フレームを 53 タイプに分類している (V = 動詞)。

表 1 格フレームの 53 タイプ (林・王・孫 (編) 1994 : 31-34)

一、一項動詞の格フレーム	
1. (V : 一項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 1 > 施事 + V	
2. (V : 一項動詞であり、非自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 2 > 当事 + V	
二、二項動詞の格フレーム	
3. (V : 二項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ぶ)	
< 3 > 施事 + V + 受事	< 4 > 施事 + V + 結果
< 5 > 施事 + V + 受事または系事	< 6 > 施事 + V + 受事または工具
< 7 > 施事 + V + 処所または受事	< 8 > 施事 + V + 受事または方向
< 9 > 施事 + V + 受事または範囲	< 10 > 施事 + V + 受事または結果
< 11 > 施事 + V + 受事または処所	< 12 > 施事 + V + 受事または目的
< 13 > 施事 + V + 受事または与事	
4. (V : 二項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 14 > 施事 + V + 同事	< 15 > 施事 + V + 原因
< 16 > 施事 + V + 与事	< 17 > 施事 + V + 系事
< 18 > 施事 + V + 目的	< 19 > 施事 + V + 依拠
< 20 > 施事 + 工具 + V	< 21 > 施事 + V + 工具
< 22 > 施事 + V + 時間	< 23 > 施事 + V + 方式
< 24 > 施事 + V + 範囲	< 25 > 施事 + V + 処所
< 26 > 施事 + V + 処所または時間	< 27 > 処所 + V + 施事
5. (V : 二項動詞であり、非自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ぶ)	
< 28 > 当事 + V + 受事	< 29 > 当事 + V + 結果
< 30 > 当事 + V + 客事	< 31 > 当事 + V + 客事または処所
< 32 > 処所 + V + 客事	
6. (V : 二項動詞であり、非自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 33 > 当事 + V + 範囲	< 34 > 当事 + V + 工具
< 35 > 当事 + V + 数量	< 36 > 当事 + V + 処所
< 37 > 処所 + V + 当事	< 38 > 時間または処所 + V + 当事
7. (V : 二項動詞であり、所有・所属を表す)	
< 39 > 領事 + V + 客事	< 40 > 領事 + V + 分事

< 41 > 領事 + V + 客事または分事	< 42 > 客事 + V + 領事
< 43 > 分事 + V + 領事	
8. (V: 二項動詞であり、繫辞にあたる)	
< 44 > 当事 + V + 客事	< 45 > 当事 + V + 系事
三、三項動詞の格フレーム	
9. (V: 三項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ぶ)	
< 46 > 施事 + V + 与事 + 受事	< 47 > 施事 + V + 受事 + 与事
< 48 > 施事 + 与事 + V + 受事	< 49 > 施事 + V + 受事 + 系事
< 50 > 施事 + V + 受事 + 範囲	< 51 > 施事 + 受事 + V + 材料または工具
< 52 > 施事 + V + 与事 + 結果	< 53 > 施事 + 同事 + V + 結果

こうした格フレーム (のタイプ) は動詞の性質、必ず必要な深層格の種類及び数を示してくれる一方、その配列が深層格を付与される語句と動詞の構成する句または文の基本的な語順を示してくれる。例えば4.の「< 25 > 施事 + V + 処所」は動詞の性質 (二項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)、必ず必要な深層格の種類 (「施事」と「処所」) 及び数 (2つ) を示してくれる一方、その配列が「「施事」を付与される語句 + 動詞 + 「処所」を付与される語句」という句または文の語順を示してくれる。

また、「< 5 > 施事 + V + 受事または系事」というタイプの格フレームにおいては、深層格は施事と受事の2つ、または施事と系事 (= 系事2 (主体の類別や身分、役割で、動詞“扮演”(扮する)、“担任”(担任する)、“当”(務める)等の表す事態の客体である。例えば“她彼女 扮演扮する 白毛女白毛女”(彼女が白毛女の役を務める)の“白毛女”である)) の2つである。深層格が施事と受事である場合と、深層格が施事と系事である場合とでは、その動詞の意味が少し異なる。例えば動詞“演”(演じる)はこのようなものである。“演”は深層格が施事と受事である場合、劇、映画等の芸能を行うことを表し (5a)、深層格が施事と系事である場合、劇、映画等で、ある役を務めることを表す (5b)。

- (5) a 学生 演 喜劇 (学生が喜劇を演じる)
学生 演じる 喜劇
 施事 受事
- b 他 演 哈姆雷特 (彼がハムレットを演じる)
彼 演じる ハムレット
 施事 系事

ただし、一般に辞書では、「劇、映画等の芸能を行うこと」と「劇、映画等で、ある役を務めること」が動詞“演”の同じ“义项”(見出しの下に意味によって配列した項目)に置かれており、この“义项”が「劇、映画等の芸能を行う。また、その中

で、ある役を務める」というふうに記述されている。即ち、施事と受事という深層格を持ち、劇、映画等の芸能を行うことを表す“演”と、施事と系事という深層格を持ち、劇、映画等で、ある役を務めることを表す“演”とは同一の動詞であると考えられている。「<6>施事+V+受事または工具」、「<26>施事+V+処所または時間」等に関しても、同じことが言える。

5 述目句の深層格と構造モデル

本節では、二項動詞の述目句の深層格と構造モデル⁶を考察する。まずは林・王・孫（編）（1994）の《（人机通用）现代汉语动词大词典》、孟・鄭・孟・蔡（1999）の《汉语动词用法词典》、及び筆者の考察に基づいて、出現頻度の高い、或いは（日本語に比べれば）特徴のある二項動詞の格フレームのタイプを整理してまとめておく（表2）。

表2 出現頻度の高い、或いは特徴のある格フレームのタイプ

施事+V+受事	施事+V+結果	施事+V+処所	施事+V+系事2
施事+V+同事	施事+V+目的	施事+V+原因	施事+V+工具
施事+V+方式	施事+V+時間	当事1+V+客事1	当事1+V+結果
当事1+V+処所	処所+V+当事1	当事2+V+系事1	領事+V+客事2

注：

同事=相手にされ、或いは除外される間接の客体である。例えば“我_私 联络_{連絡を取る} 了_た 几个_{いくつ} 同学_{同級生}”（私が数人の同級生と連絡を取った）の“几个同学”である。

原因=事態を引き起こす原因である。例えば“老太太_{おばあさん} 愁_{心配する} 路费_{旅費}”（おばあさんが旅費を心配する）の“路费”である。

当事1=動詞“是”、“姓”、“叫”、“等于”等の表す事態以外の非自発的な動作、行為、或いは状態の主体である。例えば“我_私 碰见_{出会う} 一个_{一つ} 老_{古い} 朋友_{友人}”（私が古くからの友人に出会う）の“我”である。

客事1=非自発的な動作、行為に関わる直接の客体である。例えば“我_私 碰见_{出会う} 一个_{一つ} 老_{古い} 朋友_{友人}”（私が古くからの友人に出会う）の“一个老朋友”である。

当事2=動詞“是”、“姓”、“叫”、“等于”等の表す事態の主体である。例えば“我_私 是_だ 学生_{学生}”（私が学生だ）の“我”である。

領事=所有・所属関係を有する主体である。例えば“我_私 有_{ある} 一本_{一冊} 书_本”（私が一冊の本を持っている）の“我”である。

客事2=領事の持つ客事である。例えば“我_私 有_{ある} 一本_{一冊} 书_本”（私が一冊の本を持っている）の“一本书”である。

⁶ 構造モデルに関しては、今泉（2012: 1-102）、蔣（2012a）の5.1節を参照。

次に、表2の格フレームのタイプを持つ二項動詞が構成した述目句を具体的に考察したいが、紙幅の関係で「施事+V+受事」、「施事+V+結果」、「施事+V+処所」、「施事+V+工具」、「施事+V+方式」、「当事1+V+客事1」、「処所+V+当事1」⁷のみを扱う。

5.1 施事+V+受事

「施事+V+受事」というタイプの格フレームを持つ動詞は“穿”（着る），“打”（殴る），“卖”（売る），“扔”（捨てる），“踢”（ける），“洗”（洗う），“喜欢”（好む），“修理”（修理する），“掩盖”（覆う），“阅读”（読む）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞B+語句C”という形の述目句を構成し、その上で“語句A || 動詞B+語句C”⁸という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば(6)である。

- (6) 語句A || 動詞B+語句C
- a 哥哥 || 打 弟弟 (兄が弟を殴る) (= 4 a)
- 兄 殴る 弟
- b 小蔡 || 喜欢 交响乐 (蔡さんが交響楽を好む)
- 蔡さん 好む 交響楽

そして、「施事+V+受事」という配列が深層格を付与される語句と動詞の構成した句または文の基本的な語順を示すので、この“語句A || 動詞B+語句C”では、語句Aの付与される深層格は施事となり、語句Cの付与される深層格は受事となると考えられる。例えば(6a)の“哥哥”と(6b)の“小蔡”の深層格は施事であり、(6a)の“弟弟”と(6b)の“交响乐”の深層格は受事である。

ここでは、「施事+V+受事」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図1のように描出する。図1aは述目句の構造モデルであり、図1bはそれを含んだ主述句の構造モデルである。

⁷ 表2に書いてある16タイプの格フレームは出現頻度の高い、或いは（日本語に比べれば）特徴のあるものであるが、紙幅の関係で最も出現頻度の高い3タイプ「施事+V+受事」、「施事+V+結果」、「当事1+V+客事1」と、最も特徴のあると考えられる「施事+V+処所」、「施事+V+工具」、「施事+V+方式」、「処所+V+当事1」を選んで考察する。

⁸ 以下，“||”（縦二重線）で主語と述語部分との境界を示す。

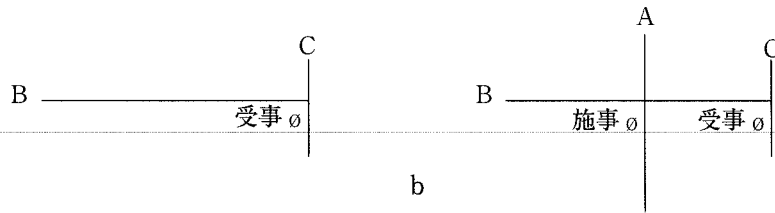


図1 「施事+V+受事」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

この構造モデルでは、水平線が動詞 B の表す属性 “B” を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が語句 A のさす対象である主体 “A” を示し、水平線と横倒れの T 字をなして接している垂直線が語句 C のさす対象である客体 “C” を示す。水平線と垂直線との交点のところに書いた “施事₀” が語句 A の深層格「施事」を示し、水平線と垂直線との接点のところに書いた “受事₀” が語句 C の深層格「受事」を示す。“施事₀” と “受事₀” の “₀” は深層格に対応する表層格が無標的であることを意味する。

具体例 (6) の構造モデルならば、図 2 のようになる。

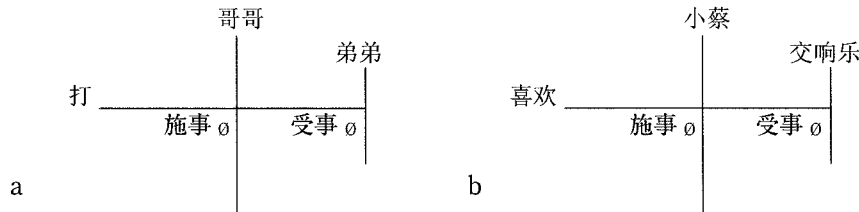


図2 (6a, b) の構造モデル

5.2 施事+V+結果

「施事+V+結果」というタイプの格フレームを持つ動詞は“成立”（創立する）、“创作”（創作する）、“发明”（発明する）、“画”（描く）、“建”（建てる）、“生产”（生産する）、“写”（書く）、“印”（印刷する）、“制造”（製造する）、“装配”（組み立てる）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (7) である。

(7) 語句 A || 動詞 B+ 語句 C

a 爱迪生 || 发明 电灯 (エジソンが白熱電球を発明する)

エジソン 発明する 白熱電球

b 画家 || 画 马 (画家が馬を描く)

画家 描く 馬

「施事+V+結果」という配列が深層格を付与される語句と動詞の構成した句または文の基本的な語順を示すので、この“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は施事となり、語句 C の付与される深層格は結果となると考えられる。例えば (7a) の“爱迪生”と (7b) の“画家”の深層格は施事であり、(7a) の“电灯”と (7b) の“马”の深層格は結果である。

ここでは、「施事+V+結果」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図 3 のように描出する。図 3a は述目句の構造モデルであり、図 3b はそれを含んだ主述句の構造モデルである。

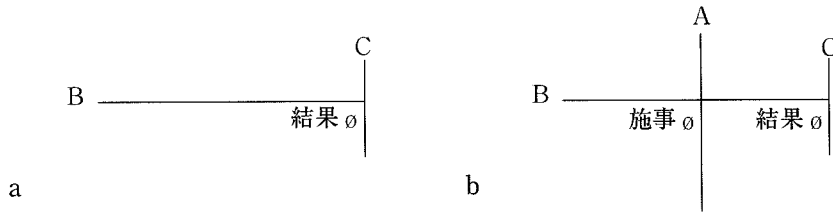


図 3 「施事+V+結果」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

この構造モデルでは、水平線が動詞 B の表す属性“B”を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が語句 A のさす対象である主体“A”を示し、水平線と横倒れの T 字をなして接している垂直線が語句 C のさす対象である客体“C”を示す。水平線と垂直線との交点のところに書いた“施事₀”が語句 A の深層格「施事」を示し、水平線と垂直線との接点のところに書いた“結果₀”が語句 C の深層格「結果」を示す。“施事₀”と“結果₀”の“₀”は深層格に対応する表層格が無標的であることを意味する。

具体例 (7) の構造モデルならば、図 4 のようになる。

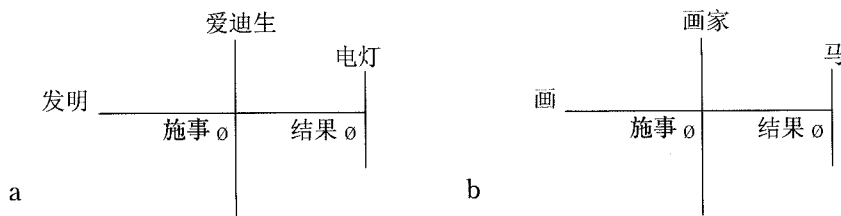


図 4 (7a, b) の構造モデル

5.3 施事+V+処所

「施事+V+処所」というタイプの格フレームを持つ動詞は“出”（出る）、“到达”（到着する）、“逛”（遊びに行く）、“回”（戻る）、“进入”（入る）、“路过”（経由する）、“爬”（登る）、“去”（行く）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語

句 C” という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (8) である。

(8) 語句 A || 動詞 B + 語句 C

- a 汽车 || 路过 那儿 (くるまがそこを經由する)
くるま 經由する そこ
- b 父亲 || 去 过 北京 (父が北京に行ったことがある)
父 行く た 北京

この“語句 A || 動詞 B + 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は施事となり、語句 C の付与される深層格は処所となると考えられる。例えば (8a) の“汽车”と (8b) の“父亲”の深層格は施事であり、(8a) の“那儿”と (8b) の“北京”の深層格は処所である。

ここでは、「施事 + V + 処所」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図 5 のように描出する。図 5a は述目句の構造モデルであり、図 5b はそれを含んだ主述句の構造モデルである。

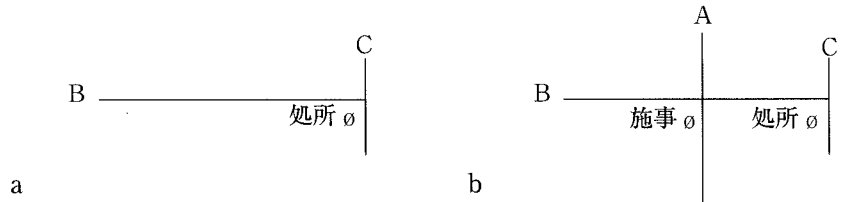


図 5 「施事 + V + 処所」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例 (8) の構造モデルは図 6 のようになる。

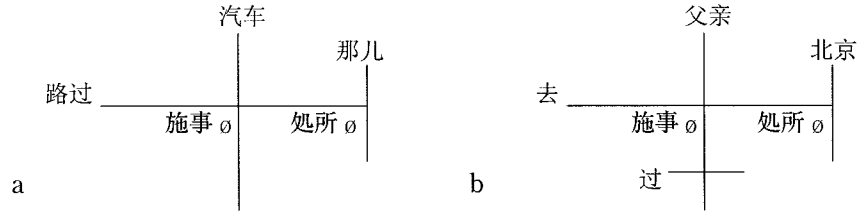


図 6 (8a, b) の構造モデル

表層では、(8b) の助詞“过”が付加成分として述語“去”に付いているが、深層では、“过”の表す意味「~したことがある」が属性を補助する働きをしている。構造モデル (図 6b) では、“过”の表す意味 (補助属性) を短い水平線で示す。

5.4 施事+V+工具

「施事+V+工具」というタイプの格フレームを持つ動詞は“盛”（どんぶり等で飯等を盛る）、“抽”（パイプ等でタバコ等を吸う）、“喝”（どんぶり等でお茶等を飲む）、“晒”（日光等で体等をさらす）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (9) である。

(9) 語句 A || 動詞 B+ 語句 C

- a 老王 || 总是 抽 烟斗 (王さんがいつもパイプでタバコを吸う)
王さん いつも 吸う パイプ
- b 赶车人 || 喝 大 碗 (馭者が大きな茶碗で飲む)
車を御する 人 飲む 大きな 茶碗

この“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は施事となり、語句 C の付与される深層格は工具となると考えられる。例えば (9a) の“老王”と (9b) の“赶车人”の深層格は施事であり、(9a) の“烟斗”と (9b) の“大碗”の深層格は工具である。

ここでは、「施事+V+工具」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図7のように描出する。図7aは述目句の構造モデルであり、図7bはそれを含んだ主述句の構造モデルである。

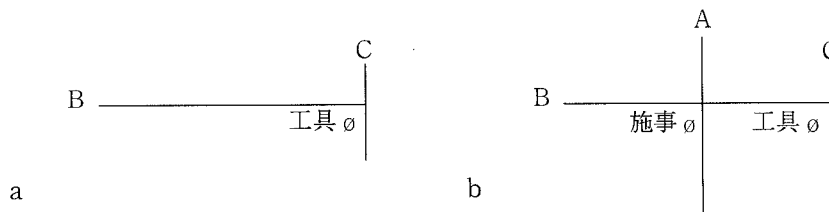


図7 「施事+V+工具」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例 (9) の構造モデルは図8のようになる。

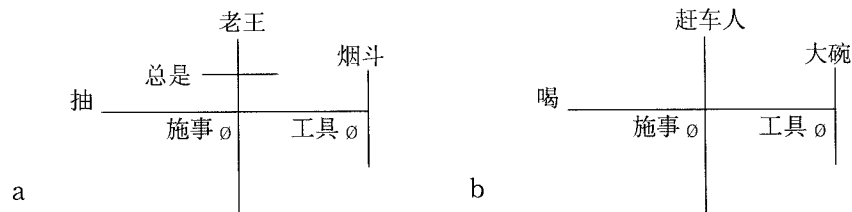


図8 (9a, b) の構造モデル

表層では、(9a) の副詞“总是”が連用修飾語として述語“抽”を修飾しているが、深層では、“总是”の表す意味が属性を補助する働きをしていると考えられる。構造モデル(図8a)では、“总是”の表す意味(補助属性)を短い水平線で示す。

5.5 施事+V+方式

「施事+V+方式」というタイプの格フレームを持つ動詞は“唱”(ある調やメロディーで歌う)、“写”(ある字体等で書く)、“走”(ある歩き方で歩く)のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞B+語句C”という形の述目句を構成し、その上で“語句A || 動詞B+語句C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば(10)である。

- (10) 語句A || 動詞B+語句C
- a 他 || 写 楷书 (彼が楷書で書く)
 彼 書く 楷书
- b 战士们 || 走 了 一段 正步 (兵士たちが歩調を取って歩いた)
 兵士 たち 歩く た 一区间 歩調を取ること

この“語句A || 動詞B+語句C”では、語句Aの付与される深層格は施事となり、語句Cの付与される深層格は方式となると考えられる。例えば(10a)の“他”と(10b)の“战士们”の深層格は施事であり、(10a)の“楷书”と(10b)の“一段正歩”の深層格は方式である。

ここでは、「施事+V+方式」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図9のように描出する。図9aは述目句の構造モデルであり、図9bはそれを含んだ主述句の構造モデルである。

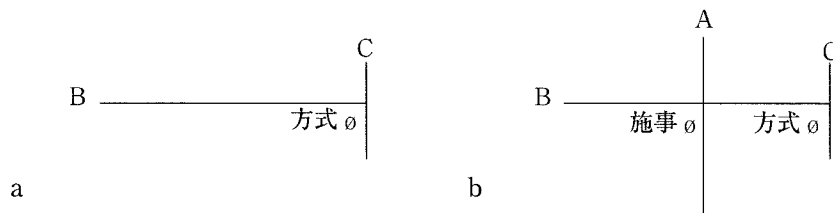


図9 「施事+V+方式」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例(10)の構造モデルは図10のようになる。

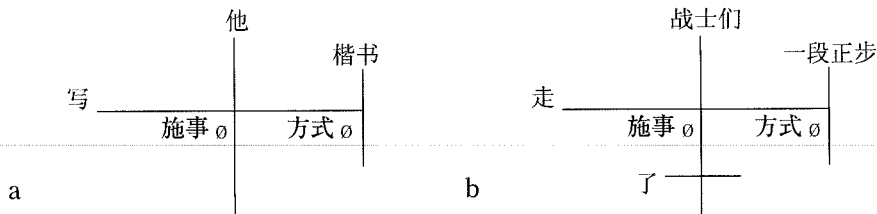


図 10 (10a, b) の構造モデル

5.6 当事 1 + V + 客事 1

「当事 1 + V + 客事 1」というタイプの格フレームを持つ動詞は“符合”（合致する）、“记得”（覚えている）、“明白”（分かる）、“碰见”（出会う）、“缺乏”（欠乏する）、“听见”（聞こえる）、“误解”（誤解する）、“遗失”（遺失する）のような非自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B + 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B + 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (11) である。

(11) 語句 A || 動詞 B + 語句 C

- | | | | | | | | |
|---|-----|--|-----|-----|----|----|-----------------|
| a | 大家 | | 都 | 明白 | 了 | 真相 | (みんなに真相が分かった) |
| | みんな | | すべて | 分かる | た | 真相 | |
| b | 我 | | 碰见 | 一个 | 老 | 朋友 | (私が古くからの友人に出会う) |
| | 私 | | 出会う | 一つ | 古い | 友人 | |

この“語句 A || 動詞 B + 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は当事 1 となり、語句 C の付与される深層格は客事 1 となると考えられる。例えば (11a) の“大家”と (11b) の“我”の深層格は当事 1 であり、(11a) の“真相”と (11b) の“一个老朋友”の深層格は客事 1 である。

ここでは、「当事 1 + V + 客事 1」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図 11 のように描出する。図 11a は述目句の構造モデルであり、図 11b はそれを含んだ主述句の構造モデルである。

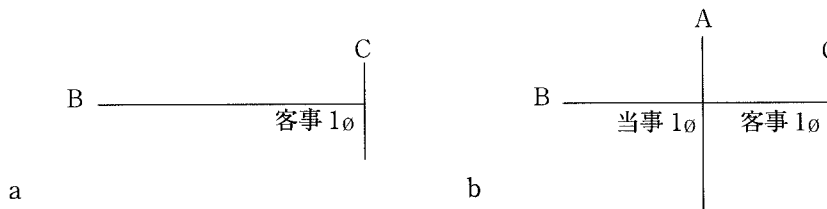


図 11 「当事 1 + V + 客事 1」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例 (11) の構造モデルは図 12 のようになる。

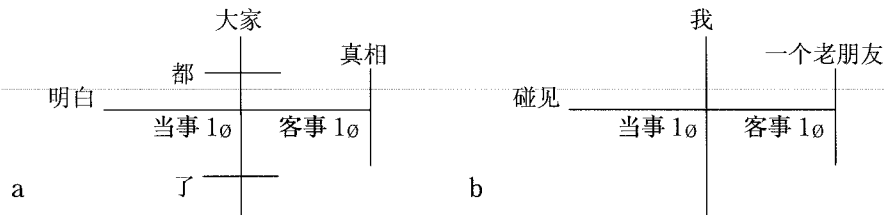


図 12 (11a, b) の構造モデル

5.7 処所+V+当事 1

「処所+V+当事 1」というタイプの格フレームを持つ動詞は“充满”（満ちる）、“挂”（掛かる）、“有”（存在する）、“沾”（付く）のような非自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (12) である。

(12) 語句 A || 動詞 B+ 語句 C

- a 她 的 眼 里 || 充满 泪水 (彼女の目に涙があふれる)
 彼女 の 目 中 満ちる 涙
- b 街 上 || 有 一辆 汽车 (大通りに一台の自動車がある)
 大通り 上 存在する 一台 自動車

この“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は処所となり、語句 C の付与される深層格は当事 1 となると考えられる。例えば (12a) の“她的眼里”と (12b) の“街上”の深層格は処所であり、(12a) の“泪水”と (12b) の“一辆汽车”の深層格は当事 1 である。

ここでは、「処所+V+当事 1」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図 13 のように描出する。図 13a は述目句の構造モデルであり、図 13b はそれを含んだ主述句の構造モデルである。

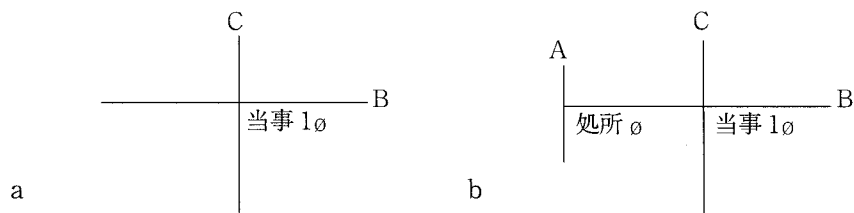


図 13 「処所+V+当事 1」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例 (12) の構造モデルは図 14 のようになる。

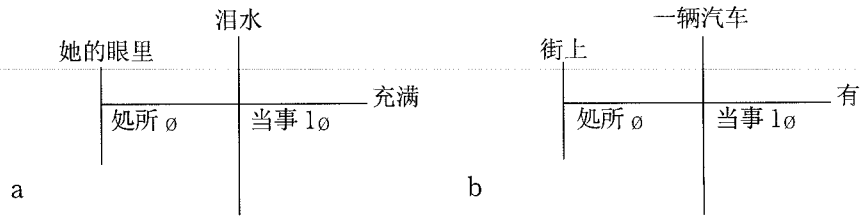


図 14 (12a, b) の構造モデル

6 おわりに

表 1 (< 3 > ~ < 45 >) と表 2 に書いてある格フレームのタイプから分かるように、述目句の目的語は受事、結果、処所、系事 2、同事、目的、原因、工具、方式、時間、客事 1、当事 1、系事 1、客事 2 等、多種多様な深層格を取ることができる。しかしながら、筆者が《(人机通用) 现代汉语动词大词典》を統計した結果によると、約 8 割の動詞はその目的語の取る深層格が受事である。即ち、述目句の目的語の取る様々な深層格で受事の出現頻度が圧倒的に高いと考えられる。この約 8 割の動詞は目的語の取る深層格が受事であると同時に、主語の取る深層格が施事である。したがって、主述句で「施事 + V + 受事」という深層格の組み合わせの出現頻度が圧倒的に高いとも考えられる。

述目句の構造モデルと、それを含んだ主述句の構造モデルに関しては、次のようなことが言える。①ほとんどの述目句は目的語となる語句 C のさす対象が客体として、述語動詞 B の表す属性と結合した構造モデル (図 15a) を有する。それを含んだ主述句は主語となる語句 A のさす対象が主体として、述目句の構造モデルと結合した構造モデル (図 15b) を有する。

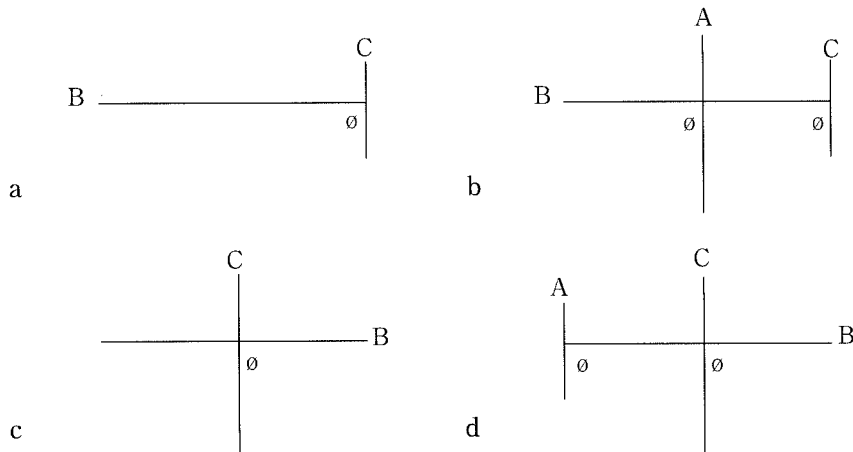


図 15 述目句と主述句の構造モデル

②わずかであるが、一部の述目句（例えば「処所+V+当事1」のような格フレームを持つ動詞が構成した述目句）は目的語となる語句Cのさす対象が主体として、述語動詞Bの表す属性と結合した構造モデル（図15c）を有する。それを含んだ主述句は主語となる語句Aのさす対象が客体として、述目句の構造モデルと結合した構造モデル（図15d）を有する。

参考文献

- 今泉喜一（2012）『日本語構造伝達文法（改訂12年版）』揺籃社
- 蒋家義（2012a）「日本語構造伝達文法の中国語への適用—予備的考察—」『大学院論文集』（杏林大学大学院国際協力研究科）第9号
- 蒋家義（2012b）「日本語構造伝達文法の中国語への適用—主述句の記述的研究—」『言語と交流』（言語と交流研究会）第15号
- 鳥井克之（2008）『中国語教学（教育・学習）文法辞典』東方書店
- 渡辺実（1971）「客語」松村明（編）『日本文法大辞典』明治書院
- 北京语言大学汉语水平考试中心（編）（2000）《HSK 中国汉语水平考试词汇大纲汉语8000 词词典》北京语言大学出版社
- 林杏光、王玲玲、孙德金（主编）（1994）《（人机通用）现代汉语动词大词典》北京语言学院出版社
- 孟琮、郑怀德、孟庆海、蔡文兰（编）（1999）《汉语动词用法词典》商务印书馆
- 商务印书馆辞书研究中心（编）（2007）《商务馆学汉语词典（双色本）》商务印书馆

